



日本人が20年代後半に月に立とうとしています。地球を回る国際宇宙ステーションとは別に、新しく月を回る基地を造ります。日本の会社も協力して、月の大地を走る車を造り、飛行士が月の水を探します。

202X年 日本人、月に立つ

宇宙に新基地

「月の水」探せ

新しい基地は遠い宇宙への入り口を意味する「ゲートウェイ」。アメリカを中心に、多くの国が協力し、23年ごろから組み立てが始まります。完成は28年ごろで、4人の飛行士が生活できます。月の南極には氷があると考えられ、ロケットの燃料にしたり、飲み水にしたりできれば、宇宙で活動がしやすくなります。アメリカはゲートウェイができる前の24年に、自分たちのロケットで飛行士を月に送ろうとしています。人が月に行くのは1960年代に、初めて月に行ったアポロ計画以来です。アメリカはその後月に行きたくて、宇宙船を持っていない日本と競争を手伝う代わりに飛行士を乗せてもらい、2020年代後半、話しています。

半に世界で2番目の着陸を目指しています。日本は今年の秋、13年ぶりに日本人飛行士を募集します。日本が得意なのは食糧や水や機械を宇宙に運ぶことです。新しい輸送機や、打ち上げに使ったロケットを返しています。飛行士の命を守る技術も得意で、ゲートウェイで使われそうです。月を走る車「ルナ・クルーザー」は、タイヤ付きの宇宙船で、2人の飛行士が約40日間生活できます。小さいところから他の天体に行きたいと考えていた日本人飛行士の大西卓哉さん(45)は、宇宙がどんな身近になつていこうか、得意なことを生かして挑戦してほしいと話しています。

JAXA宇宙飛行士 大西卓哉さん

子どものころから他の天体に行ってみたかった

日本人が月を目指す理由は宇宙航空研究開発機構(JAXA)の宇宙飛行士、大西卓哉さん(45)に聞きました。

「なぜ月を目指すのですか。」
「米国のアポロ計画は月に行くこと自体が目的でした。今回は人類の活動領域を月に広げることが目標。水などの資源探査をし、月で経済活動をするためのインフラ整備に挑みます」
「参加の意義は。」
「日本は科学技術で国際社会での地位を確立し

ました。今後も存在感を示すには月探査への参加が重要です。究極的には人間は、宇宙に進出しなければ膨張する太陽にのみ込まれ、地球で滅亡する生き物。宇宙への進出は種としての重大な使命です」
「課題は何ですか。」
「月の自然環境を考える必要がある。国際宇宙ステーションでの活動とは比較にならない危険性もある。月の水を利用できるかどうか、今後の探査の方向性を決めます」
「大西さんも目指すのですか。」
「子どものころから他の天体に行ってみたかった

新型補給機HTV-Xの機型を手にする宇宙飛行士の大西卓哉さん=JAXA筑波宇宙センター(JAXA提供)



っており、月への憧れがありました。チャンスがあるのはうれしい。行けたとしても50代、技術に磨きをかけて挑みます。宇宙船の操縦や船座の判断

が求められる場面では、飛行機のパイロット経験を生かしたいです」

「日本の強みは。」
「物作りのきめ細かさや確実性。月周回基地「ゲートウェイ」は月や火星への入り口であり、地球から遠い。補給の機会は限られ、確実な輸送が必要ですが。日本は無人補給機「こうのとり」の実績があり、月面探査車への期待も大きいです」
「宇宙が身近になりましたね。」
「人間は未知の世界を追い求め、文明レベルを高めてきた。宇宙には知らないことがたくさんある。多くの人が、強みや技術を生かして挑戦してほしいですね」

おおにし・たくや 1975年東京都生まれ。東大卒。全日空の副操縦士を経て、2009年に宇宙飛行士の候補者に選抜。16年に国際宇宙ステーションに長期滞在した。

私達が子どもの頃は月に辿り着くことに熱狂していました。そして辿り着く中での人間模様が映画化され、宇宙が身近なものとなりつつあります。

鉄腕アトムの世界が3次元の感動を得て、さらには4次元やVRの世界から更なるリアリティを得て、次の夢を見せてくれる。君達の中にもこれに携わる人が出てくると良いですね。